



書評

行動経済学で学ぶ感染症

武藤 義和 著

マスクも納得も行動経済学で

〔評者〕 忽那 賢志 阪大大学院教授・感染制御学

武藤義和先生の著作『行動経済学で学ぶ感染症』は、他の診療科から感染症のコンサルテーションを受ける医師や、病院内の感染対策を担当している医療従事者にとって、どうすれば業務を円滑に進めさせることができるのかという日ごろの悩みの大きなヒントとなる作品である。

武藤先生は国立国際医療研究センターで勤務していた際に私の後輩であったわけだが、彼がこのような作品を書き上げるというのはとても意外であった。私の彼のイメージは『『プレジデント』というオッサンが読む雑誌を読んでいる』『マリオカートがめっちゃくちゃうまい』『とにかく滑舌が悪い』というもので、当時はこのような作品を作り上げるとは思っていなかった。とはいえ、コロナ禍においては彼は病院内のコロナ診療や感染対策だけでなく、論文の執筆、世間への情報発信など八面六臂の大活躍を見せており、彼の処理能力の高さやコミュニケーション力にうならされていたものである。

しかし、それでも、武藤先生が「行動経済学」の本を書いたというのは本当に驚いた。「なんで武藤先生が行動経済学の本を……？」と。しかし、本書を読み進めるにつれ、行動経済学と感染症の相性の良さを思い知ることとなった。

私自身、感染対策に行動経済学を取り入れたいと考えたことは何度もあった。コロナ禍が5類感染症に移行した直後、社会ではマスク着用が「個人の判断」とされる一方、病院内では依然として高齢者や免疫不全者を守るためマスク着用を求めざるをえない状況が続いていた。その中で、マスク未着用で来院する患者や家族に職員が注意すると反発を受ける事例が頻発し、対応に苦慮していた。そこで行動経済学の専門家に相談したところ、「病院でマスクを着ける必要はない」として助言を拒まれた。この経験から、行動経済学は有用である一方、感染対策の文脈を欠いたまま用いれば、使い手の価値観に強く左右される学問でもあると感じ、距離を置くようになったので

あった。

さて、武藤先生の著作を読んでもわかったことは、やはり行動経済学は非常に興味深い学問であり、感染症診療・感染対策にかかわる医療従事者にとって重要なツールであるということである。私はつい専門家に頼ってしまったわけだが、自分自身が学んで業務に生かせばよかったのだと思い知った次第である。感染症・感染対策については、おそらく本書の読者にとっては当たり前のことが書かれているのだが、それをいかに現場に浸透させるかということが丁寧に書かれており、それが本書の核心である。「〇〇の法則」がたくさん出てくるので、一度読んだだけではなかなかすぐに応用とはいかなそうではあるが、本書を机に置いて行動経済学的なアプローチを業務に導入することで、今後の仕事が楽になることは間違いなさだろう。

A5判・頁212 2025年10月
定価：4,180円（本体3,800円＋税10%）
[ISBN978-4-260-06249-7] 医学書院刊

